



おおあし

第5号

《 大芦小HP <https://oashi-e-konosu.edumap.jp/> 》

平和への願い

令和4年度第2学期を無事迎えることができました。お陰様で夏休み中に大きな事故はありませんでした。保護者の皆様のお子さんへの安全指導や健康管理に感謝申し上げます。

さて、1学期の終業式の式辞で、8月15日の終戦記念日にあわせて、戦争に関する話をしました。日本は約80年前まではアメリカと戦争をしていたこと、その戦争によって、たくさんの日本人や外国人が亡くなったこと、特に、広島や長崎には原子爆弾が投下され、およそ13万人の方が、原爆の威力によりほとんど一瞬で命を奪われたことなどを話しました。また、戦争が翌日には終わるという深夜から未明にかけて、熊谷市では空襲があり、266名もの犠牲者が出たこと、そのうちの約100名は、市街地の中心部を流れる星川（ほしかわ）に飛び込んで亡くなったことなど話しました。現在、星川には、あの長崎の平和祈念像を制作した、彫刻家、北村西望（きたむらせいぼう）の「戦災者慰霊の女神」が建てられていることも紹介しました。

埼玉県立熊谷図書館の郷土史コーナーで、熊谷の空襲関連の資料を数冊読んでいろいろなことがわかりました。熊谷市が空襲の対象となった理由は、①群馬県太田市の中島飛行機の戦闘機を製造する軍需工場の関連会社や下請工場があったため。②中都市を爆撃することで最後のダメージを与えるため。③かつての県庁所在地であり軍事拠点を想定したため。などと書かれています。なお、7月には敵機から「熊谷良いとこ花の街 七月八月灰の街！」と書かれたガリ版刷りのビラがまかれていたそうです。星川近くには埼玉県立熊谷女子高校（当時の熊谷高等女学校）あり当時講堂に海軍艦政本部が設置され、中島飛行機小泉製作所設計試作部隊の、長距離爆撃機連山設計試作部隊も滞在したようです。空襲時には理研などの軍需工場に動員されていた遠方の生徒が寄宿舎に泊まっていた防空壕に避難したものの、先生の指示・説得で防空壕を出て肥塚方面に逃げて助かったとあります。当時の小学校は『国民学校』となり、児童は皇国の民となりましたが、女学校生も動員されたことがわかります。熊谷女子校には空襲の「傷跡」を見ることができます。校門の門柱です。（北門 通称「北大通り」（テニスコート側）空襲を受けながらも煉瓦の校門は焼け残ったのです。

作家森村誠一は、12歳の時にこの空襲を体験しており、「熊谷市は、太平洋戦争における最後の犠牲であり、まったく無意味な葬り去られた犠牲の羊（スケープゴート）であったのである。」と述べています。「二十四の瞳」の作者壺井栄は、妹が熊谷に住んでいた縁でたびたび熊谷を訪れており、「母のない子と子のない母と」等、熊谷のことが書かれている小説も書いています。その「二十四の瞳」の中で、大石先生が「みんなには戦争に行ってもほしくない」と話したことが、やがて校長の耳に入り、校長室へ呼ばれて説教を受ける場面があります。戦争に反対すると「非国民」と言われた時代です。大石先生の夫は海戦で戦死。やがて出征した教え子の男子の半数は戦死、中には命は助かったものの大けがを負い失明した者もいました。数十年経ち大石先生のために同窓会が開かれます。会の中心となったのは、母校で教壇に立つ教え子でした。12名のうち集まったのは消息の分かるほんの数名でした。そこで、失明したかつての教え子「磯吉」は、小学校1年生のときのクラスの写真の集合写真を手のひらに置いて指をさしながら、ここは〇〇さん、となりは〇〇さんとその表情や場所など懐かしそうに話します。しかし、その指先は、ずれているのでした……。ぜひ、お子さんにも薦めていただきたい本です。

戦争や平和に関する教材は国語や社会科の教科書や資料集にも掲載されていますので、保護者の皆様も時々ご覧になっていただきお子さんと一緒に平和について話し合っただけだとありがたく存じます。

(校長 橋本 浩)